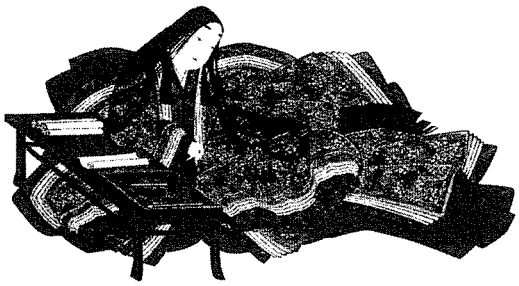
紫式部と石山寺

紫式部は石山寺に1週間の参籠をされ、本尊如意輪観音菩薩に物語創作の祈願をされた。時に寛弘元年(西暦1004年)8月15日、対岸の金勝山よりさし上る明月が眼下の瀬田川に映る風情を眺めて筆をおこされたのが、須磨、明石の二帖であります。

その後源氏物語が有名となると共に参籠室が「紫式部源氏の間」と称され、石山の秋月も近江八景の一つに数えられるに至ったのであります。

石山寺と紫式部展のしおり

石山寺・紫式部・源氏物語の世界



石山寺豊浄殿

石山寺の歴史と信仰

聖武天皇が、奈良に東大寺の建立と十六丈の金銅の盧舎那仏（大仏）の鋳造を発願されたのは、天平15年（743）でした。ところが、それに必要な黄金が日本にないので、良弁僧正に祈らせます。お告げによって良弁僧正は近江国石山に草庵を建て、天皇の念持仏をその巌の上に安置して祈祷すると、陸奥国から金が掘り出されて無事大仏は完成しました。この時の草庵がもとになって、天平19年（747）に石山寺が開かれたと、『石山寺縁起絵巻』（石山寺蔵・重要文化財）が伝えています。江戸時代に境内から発掘された大きな軒瓦によって、石山に瓦ぶきの大伽藍が白鳳時代（７世紀後半）にすでに成立していたことが確認されています。また、最近では、平成14年に、秘仏本尊如意輪観音の像内から四軀の金銅造仏像と水晶製五輪塔が発見されるという大きな出来事がありましたが、それらは飛鳥・白鳳・天平の愛らしい仏像で、それからもこの事実を知ることができます。

石山寺の御本尊如意輪観音は創建以来人々の信仰を集め、参詣の人が絶えません。平安時代には花山法皇によって、西国三十三所の観音霊場が選定されましたが、石山寺はその第十三番の札所になり、「石山詣」と呼ばれる、多くの参拝者を迎え入れて現在に至っています。

学問と芸術の寺・石山寺

石山寺は学問の寺としての伝統を守ってきました。当初、東大寺との関係から「官の寺」として発足しますが、平安時代に入り、次第に独立した寺院としての活動を展開するようになり、菅原道真の孫に当たる三代座主の淳祐内供（しゅんにゅうないく）が学問の寺としての方向性を確立します。以来、多くの学僧による研究の深まりとともに、経蔵の整備充実が図られ、平安時代後期の念西（ねんさい）・朗澄（ろうちょう）らのさらなる尽力によって、世界に誇る「石山寺一切経」（重要文化財）を中心にした仏典の大コレクションが形成されました。江戸時代に至って、尊賢（そんけん）僧正は、その一切経の装丁を閲覧に便利なように折本に統一するなどの大事業を推進し、あわせて、石山寺についての種々の記録や資料を調査整理しました。このような学問の寺としての伝統は、現代においても脈々と受け継がれています。

こうした活動は、当然信仰・礼拝の対象である仏像の造立、伽藍の建立にも広く及び、それが美しいだけではなく、文化財としていかに貴重なものであるかは、本堂、多宝塔をはじめとする堂塔と、そこに安置される仏像の多くが国宝・重要文化財に指定されていることからもうかがえます。

戦国時代の混乱期には、本寺も少なからぬ災厄を蒙ったのですが、近江の豪族浅井（あざい）長政の娘茶々（のちの淀殿）が、損害を受けた伽藍の再興に大きな力があったことも記憶しておきたい事実です。

鬼になった朗澄さん

文泉房朗澄（1131～1209）は幼少のころに石山寺に入って修学し、学僧として多くの聖教を書写・収集します。それを後世に永く伝えるために、死後も鬼となって守護するという誓いを立てます。その願い通りに、金色の鬼となって西方の山の峰に現れた姿が『石山寺縁起絵巻』に描かれています。お寺の右手にはそれを記念して庭園「遊鬼境」が作られ、毎年5月第3日曜日には、朗澄さんの学徳を偲ぶ「青鬼祭」が催されます。

鬼の姿となった朗澄律師
（遊鬼境）

石山寺と紫式部

紫式部は、多くの平安貴族の女性たちと同じように、石山詣をした一人でしたが、参籠して琵琶湖の湖面に映る十五夜の名月を眺めて、『源氏物語』の構想を得て書き始めたと伝えられています。『石山寺縁起絵巻』をはじめ多くの文献に記され、古くから親しまれたこの伝承によって、人々は石山寺に足を運び、紫式部が籠ったという源氏の間、執筆に使った硯、奉納した大般若経などによって平安の昔を偲び、光源氏の世界に思いを馳せました。千年にわたって石山寺は多くの『源氏物語』の読者をはぐくんできたのです。さらに、この偉大な物語が書けたのは作者紫式部が観音の化身(けしん)だったからというような説話が生まれたのも、石山寺の観音に対する人々の深い信仰があったからでしょう。

このようなゆかりから、石山寺には『源氏物語』にまつわる和歌・絵画をはじめ、さまざまな優品が数多く伝来しています。

源氏物語と石山寺

『源氏物語』は光源氏(ひかるげんじ)を主人公として、桐壺(きりつぼ)の巻に始まり夢の浮橋(うきはし)の巻に至る五十四帖の長い物語です。決心して読み始めても、なかなか全部読み切れません。まして、平安時代の文章はかなり難解です。そこで、昔から“楽に読める”、“楽しく読める”方法が考えられてきました。

一つは、絵によって想像力を高めて物語の進行を楽しむという方法です。各巻から選ばれた名場面を、当代の代表的な絵師が描いた「源氏絵」は、画帖や屏風に構成されました。石山寺には、各時代に制作された美しい源氏絵が数多く伝来しています。

また、長編の物語を手早く読みたいという読者のために、物語のダイジェスト版もたくさん作られました。そのひとつ『源氏小鏡(げんじこかがみ)』は、読みやすくわかりやすいことで、同類の本の中で群を抜いて人気を博しました。

石山寺蔵の『源氏小鏡』はその中でも「たったひとつの」貴重な本です。『源氏小鏡』は、江戸時代に出版されたものも含めてさまざまな種類のテキストが作られ、多くの人々に愛読されました。でも、美しい「彩色の挿絵付き」は石山寺本だけです。実は、ドイツのバイエルン州立図書館にもう一本ありますが、日本で見られるのは唯一石山寺本なのです。

源氏物語を絵で読む

源氏絵の代表的な作者は、石山寺に所蔵される作品の絵師に限っても、土佐光吉、土佐光則、土佐光起、土佐光成、土佐光祐、土佐光芳、住吉如慶、住吉具慶、清原雪信、狩野養信の名を上げることができます。彼らは、その時代の源氏物語愛好家の求めに応じて腕を振いました。ただし、自由気ままに場面を選び、好きなように描いたわけではありません。選ばれる場面はさまざまですが、一定の場面に集中する傾向がうかがえます。当然、感動的な場面、物語として盛り上がる場面が多くなります。また、絵師の世界には土佐派、住吉派、狩野派などの流派があり、その派の中で生まれ、継承された伝統を守る意識も見逃せません。その伝統は源氏絵を次第に磨き上げてゆく方向に働きますが、一方、その伝統の枠の中で、いかに工夫し個性を打ち出すかという努力も見られます。

源氏絵を鑑賞する場合は、物語の中のどの場面かという大きな観点と同時に、その絵がどのような伝統のもとに描かれ、さらにどのような絵師個人（あるいは注文主かも知れません）の工夫創意があるかを比較しながら見ると一層の興味がわき、源氏物語の世界により深く入ることができるでしょう。

“今宵は十五夜なりけり”

物語の執筆を依頼された紫式部は、石山寺に籠って想を練ります。折しも十五夜の満月が昇り、琵琶湖の湖面に美しく映えます。式部の頭に、ある青年貴族が心ならずも須磨の地に身を置いて、海面に映る月を眺めて都を恋しく思う情景が浮かび、とっさに「今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく――」と書き始め、そこから一気に長大な物語が紡ぎだされました。『源氏物語』は桐壺ではなく須磨の巻の途中から書き始められたという美しい伝説です。

石山寺縁起絵巻 第四巻（重要文化財）